



# 根堀台だより

平成30年2月15日

第 96号

校訓「進歩(文)」「健康(武)」「協力(道)」

## 最後の定期テスト 3年間の締めとして



3年間の総まとめに挑む



2月14日(水)、3年生の期末テストを行いました。3年生にとっては「最後の定期テスト」となりました。1・2年生の時は3学期制だったので年間5回、そして今年から2学期制になったので年間4回、中学生活で14回の定期テストを経験してきたこととなります。

小学校と中学校の大きな違いの一つが「定期テスト」であり、中学生になって「点数」だけでなく自分の「順位」まで成績として評価されるようになりました。小さな学習集団ではありますが、この3年間成績に「一喜一憂」してきたことだと思います。最後のテストに向かう3年生の真剣な態度を見ていると、この3年間の成長ぶりは勿論です

が、間もなく入試本番を迎える張り詰めた雰囲気はひしひしと伝わってきました。

宮本武蔵の「五輪書」の中の「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とする」という言葉をこれまで何度か紹介してきました、この「鍛錬」という言葉ですが、「五輪書」では金偏の「錬」ではなく、糸偏の「練」と記載されています。そもそも「鍛」には金属を熱し、打って強くするという意味があり、「錬」には硬いものを柔らかくし、粘り強くするという意味があり、これは金属(武器など)を作る鍛冶屋の仕事からきているそうです。

宮本武蔵の言葉を解釈すると「千日万日の稽古を積んでこそ鍛錬と言える」となります。また、『鍛』という字には『千』という意味があり、『錬』という字には『万』という意味もあるそうです。3年生が過ごす中学校の3年間は「1095日」です。この由利中学校で学んできたことは『鍛』にあたります。『鍛』には「金属を打ちたたいて上質のものにする」と「心身などをきたえて強くする」の2つの意味があります。3年生は由利中での3年間の学びによって「知的な向上」と「最後までやり抜く強さ」を身に付けました。3年生はそういう自信と誇りをもって高校入試という大舞台での「勝負」に向かってほしいものです。

「祈 全員合格」という言葉が掲げられた3年棟で最後の定期テストに臨む3年生。みんなのこれまでの努力や精進は誰もがよく知っています。今日まで頑張ってきた自分自身を信じ、最後までやり抜きましょう。頑張れ3年生!

# 認知症サポーター養成講座 正しく理解し、助け合おう



講師の〇〇〇さん



真剣に耳を傾ける1年生



認知症は誰にでも起こりうる脳の病気です。特に、高齢化社会の進展に伴い、その数は増加し、85歳以上になれば4人に1人に認知症の症状があるとされています。

養成講座では「認知症の原因となる脳の病気」や「認知症の症状」として、「覚えられない、すぐ忘れる」という「記憶障害」、「今自分がどういう状況にいるのか理解できない」という「見当識障害」、「ものを考えることが難しくなる」という「理解・判断量の障害」、「計画を立てて段取りすることができない」という「実行機能障害」について説明を聞きました。そして、「自分は認知症かもしれない」と本人が感じることで、自信を失い、その結果症状が進行するという悪循環に陥ることになるそうです。だから、失敗した時、「また失敗した」ととがめるのではなく、「大丈夫だよ」と声をかけることで、病状が改善されたり、進行が遅くなったりするので、いかに認知症の人への接し方が大切か、周りの人の理解がどれだけ支えになるかということ子どもたちは学んだようです。

◎認知症の人は見た目では分からないので、お年寄りの人が困っていたら、言葉や行動に気を付けて関わりたいです。ちょっとした言葉や行動によって相手を傷付けずに、優しく優しく接したいと思いました。(〇〇 〇)

◎自分にできることは認知症の人に会ったらまず見守り、助けが必要そうな時は注意したり、怒るのではなく優しく教えてあげることだと思います。おじいさんやおばあさんの話し相手になってあげて、昔の話をしてあげたり、余裕をもって広い心で接してあげたいです。(〇〇 〇〇)

「自分たちにできることは何か」と考えることが、世の中を変える最初の一步となります。身近なところから始めることが「こころのバリアフリー社会」につながっていきます。子どもたちにとって「生き方」についても考えることができた有意義な講座でした。